2016 年度第 1 回勉強会

日時：2016 年 7 月 12 日（火）13:00–15:30

場所：早稲田大学文学学術院（戸山キャンパス）33 号館 3 階 第一会議室

今回の勉強会では、日野研究室のメンバーが行ってきた研究のうちのいくつかを紹介します。

発表

1. 吉原将大(早稲田大学大学院文学研究科)「日本語の音読・発話における機能的音韻単位の検討」

発話・音読プロセスの処理ユニット(機能的音韻単位)は、言語によって異なると仮定されている(O'Seaghdha et al., 2010)。たとえば、英語は音素、中国語は音節が機能的音韻単位だと考えられている。これまで、日本語の単位はモーラだと考えられてきたが(Verdonschot et al., 2011), Yoshihara et al. (submitted)は仮名と漢字で単位が異なる可能性を示した。仮名文字は1モーラに対応するが、漢字の多くは2モーラ以上に対応することから、機能的音韻単位は言語によって個別に決定されるのではなく、文字と音の対応関係という原則によって決定される可能性がある。本発表では、発表者がこれまでにに行った、日本語の機能的音韻単位に関する研究結果について紹介する。

2. 井田佳祐(早稲田大学大学院文学研究科)「漢字語に対する自動的音韻活性化: ERP による検討」

漢字語の音韻活性化の時間的推移について検討するため、マスク下プライミング語彙判断課題遂行中の事象関連電位(ERP)を測定した。行動指標においては、有意な同音語プライミング効果が観察された。ERPにおいては、ターゲット提示後250ミリ秒で同音語条件の振幅が統制条件の振幅よりも陽性方向へシフトするN250効果が観察された。このERPの結果は、英語や仮名語で観察されたN250効果とタイミングや部位が類似しており、音韻活性化が生じるタイミングは言語や表記に依存せずほぼ一定である可能性を示唆している。

3. 楠瀬悠(早稲田大学総合人文科学研究センター招聘研究員)「視覚的単語認知における漢字語の意味検索経路の検討」

本研究では、視覚的単語認知における漢字語の意味検索経路について、ターゲットの出現頻度を操作し、検討を行った。楠瀬・日野(2015)は、低頻度の漢字二字熟語を用いた関連性判断課題を実施したところ、形態隣接語条件でも音韻隣接語条件でも有意な抑制効果を観察したことを報告した。この結果から、漢字語における意味検索ルートは、形態情報から直接意味情報へアクセスする直接経路と形態情報から音韻情報を媒介して意味情報へアクセスする音韻媒介経路の両方が使用されることが明らかとなった。そこで本研究では、どちらの経路を使用するかを規定する要因として、形態情報の親近性に注目し、両隣接語条件それぞれのターゲットの頻度を操作し、漢字語における意味検索経路について、さらなる検討を行った。

4. 日野泰志(早稲田大学文学学術院)「漢字語の音韻—形態対応の一貫性効果」

漢字二字熟語を使った視覚課題と聴覚課題において語が持つ音韻—形態対応の一貫性の操作を試みた。Ziegler, Petrova & Ferrand (2008)と同様、聴覚的語彙判断課題では、有意な一貫性効果が観察されたのに対して、通常の視覚的語彙判断課題では一貫性効果は観察されなかった。しかし、低輝度刺激を使った視覚的語彙判断課題とマスクされた視覚刺激に対する知覚同定課題では、有意な一貫性効果が観察された。これらのデータは、語の読みや聞き取りの際に、形態—音韻間の交互作用が機能していることを示唆する。これらのデータをもとに、語の読みや聞き取りの際に機能する形態—音韻交互作用の性質について考察する。